

## 令和6年度 大阪市立市岡中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

### 1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

### 2-1 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

### 2-2 「大阪市版チャレンジテストplus」の調査の目的

- (1) 生徒及び保護者が、学習理解度及び学習状況等を知り、目標をもって主体的に学習に取り組めるようにする。
- (2) 学校が生徒一人ひとりの学力を的確に把握し、学習指導の改善及び進路指導に活用する。
- (3) 学びの連続性を確立する観点から、客観的・経年的なデータを把握、分析し、効果的な指導方法や課題を「見える化」し、その改善に役立てる。

### 3 「大阪市英語力調査（GTEC）」の調査の目的

- (1) グローバル社会において活躍し貢献できる人材の育成をめざし、生徒の英語力の充実・向上を図るため、本市教育振興基本計画に基づき、生徒に求められる英語力や学習の習熟過程等を把握・検証する。
- (2) 生徒が自らの英語力を的確に把握するとともに、生徒の英語力の実態を分析することにより、各学校における学習指導の充実や改善、工夫に役立てる。

### 4 「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の調査の目的

- (1) 子供の体力・運動能力等の状況に鑑み、国が全国的な子供の体力・運動能力の状況を把握・分析することにより、子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会、各国公立学校が全国的な状況との関係において自らの子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、子供の体力・運動能力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各国公立学校が各児童生徒の体力・運動能力や運動習慣、生活習慣、食習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

[illegible]

調査結果から

【成果と課題】

○全国学力・学習状況調査結果

＜国語＞ 全国と比較して、「思考力、判断力、表現力等」について、「書くこと」の領域において-7.5ポイント、「話すこと・聞くこと」の領域において-8.3ポイント、「読むこと」の領域において-7.5ポイントと、いずれの領域においても大きく下回る結果となった。一方、「知識及び技能」については、「言葉の特徴や使い方に関する事項」は-8.1ポイントと大きく下回ったが、「情報の扱い方に関する事項」は-3.9ポイント、「我が国の言語文化に関する事項」は-1.9ポイントと全国との差が他の領域と比較すると少ない結果となった。また、無回答率については3.5%と、全国の3.7%よりも少なく、解答しようとする意欲の高さは見て取れる結果となった。

＜数学＞ 全国と比較して、「数と式」の領域において-10.0ポイント、「図形」の領域において-7.6ポイント、「関数」の領域において-6.1ポイント、「データの活用」において-16.1ポイントと、いずれの領域においても大きく下回る結果となった。特に全国との差が大きい「数と式」「データの活用」の領域においては、無回答率も全国と比較して高い数値であり、重点的に取り組んでいく必要性を感じる。

【今後に向けて】

○全国学力・学習状況調査結果

＜国語＞

「知識及び技能」の「言葉の特徴や使い方に関する事項」における正答率を上げるために、漢字または語彙の小テストを毎時間実施し、定着を図る。

「読むこと」「書くこと」の領域における正答率を上げるために、授業の中で、生徒が主体的に本文を読みながら答えや根拠を探す練習や、表やグラフと文章を結びつける練習などに取り組む。また、単元の最後に、自分の意見や考えを文章として言語化できるように指導を行う。

＜数学＞

年間を通じて習熟度別授業を展開している。また、領域ごとにクラス編成を変更することで、苦手な項目にアプローチできるようにする。さらに、夏休みの課題から、公立入試の過去問に取り組んでいるところであり、何度も復習できるようにしていく。特に、「データの活用」については、文章を読み解く必要がある領域であり、復習する機会を増やすとともに、問題文の意味を理解できる授業展開を行う。

調査結果から

【成果と課題】

○中学生チャレンジテスト(3年生)

＜国語＞ 平均点の対府比が0.99(-0.8ポイント)であった。昨年度の対府比は0.95であり、向上している結果となった。「話すこと・聞くこと」においては0.1ポイントではあるが、府の平均点をわずかに上回ることができた。一方「知識及び技能」においては-0.7ポイントと下回っている。

＜社会＞ 平均点の対府比が0.91(-4.7ポイント)であった。分類別にみても、どの分類においても大阪府の平均を下回っているが、問題形式別にみると、「短答式」「記述式」においては大阪府との差が少ない結果となっている。地理的分野の平均点が大阪府と比較して-3.1ポイントと大きく下回っており、正答率の低い問題を復習するなど対応が必要である。

＜数学＞ 平均点の対府比が0.85(-7.3ポイント)であった。分類別にみると、「図形」「知識・技能」において、大阪府の平均と比較して大きく下回る結果となった。得点集計値をみると、15～19点の層が全生徒の14%と一番多く、引き続き習熟度別授業において、基礎的な学習内容について支援していく必要がある。

＜理科＞ 平均点の対府比が0.88(-6.6ポイント)であった。昨年度の対府比は0.75であり、向上傾向にある。「エネルギー」の領域において-0.6ポイント、「粒子」の領域において-2.2ポイント、「生命」の領域において-2.1ポイント、「地球」の領域において-1.6ポイントと、いずれの領域においてもわずかに下回る結果であった。

＜英語＞ 平均点の対府比が0.96(-2.1ポイント)であった。昨年度の対府比は0.93であり、向上している結果となった。全領域においてわずかに大阪府の平均を下回る結果となっているが、設問別にみると、大阪府の平均を上回っているものも多くある。今後、習熟度別授業等を行い、60～80点台の層を増やしていきたい。

【今後に向けて】

＜国語＞ 「知識技能」の向上のため、引き続き授業の開始時には、漢字テストや語彙に関するテストを行う。「書くこと」「読むこと」の観点においては、文章を正確に読み、本文を理解する。そして、自分の考えを言語化できるよう、授業でも工夫していきたい。

＜社会＞ 設問ごとの正答率を大阪府と比較して、約10ポイント以上上下回るもののほとんどは知識技能の観点であり、地理的分野では、縮尺の計算・世界地理の範囲で、歴史的分野では、古代から中世にかけての範囲が多かった。そこで、特に1年生で履修した範囲を中心に、復習プリントを廊下等に常設して自主学習の手助けをしたり、デジタルドリルに取り組ませたりしていきたい。

＜数学＞ 入試対策を意識した習熟度別授業を展開していく。特に、大問□の計算全般や基礎問題を中心とした問題演習の量をこなすクラスと公立高校特有の問題や長文問題などの応用問題をこなすクラスに分割して、入試対策の学習を進めていく。

＜理科＞ 昨年度に比べて対府比は向上しているが、4分野において大阪府の平均を下回っている。特に「粒子」「生命」分野については、2ポイント以上低くなっているため、3学期は復習にも力を入れていきたいと考えている。

＜英語＞ リスニングの力は比較的ついていっている一方で、ライティングとリーディングの力が不足しているという結果になった。特に、会話文での読み取りや動名詞の使い方などを苦手としている。今後、教科書以外の英文に触れさせ、英文読解に慣れさせたい。また、2年生で学習した文法についての復習にも取り組んでいきたい。

調査結果から

【成果と課題】

○中学生チャレンジテスト(2年生)

＜国語＞ 平均点の対府比が1.02(+1.4ポイント)であり、昨年度の対府比0.97と比較し、学力が向上し、府の平均を上回る結果となった。特に、「知識・技能」の観点においては+1.4ポイントと上回っている。

＜社会＞ 平均点の対府比が1.12(+5.8ポイント)であり、昨年度の対府比1.14と比較し、少し下がってしまった。分類別にみると、「地理的分野」「知識・技能」「選択式」において+4ポイント以上大阪府の平均を上回っている。記述式については+0.5ポイントであり、向上できるよう努めたい。

＜数学＞ 平均点の対府比が0.91(-4.6ポイント)であり、昨年度の対府比0.98と比較し、大阪府の平均との差が大きくなった。分類別にみると、全分野で大阪府の平均を下回っており、特に「知識・技能」において大きく下回る結果となった。得点集計値をみると、20～24点の層が全生徒の12.4%と一番多く、引き続き習熟度別授業において、基礎的な学習内容について支援していく必要がある。

＜理科＞ 平均点の対府比が0.94(-3.0ポイント)であり、昨年度の対府比0.92と比較し、向上傾向にある。全分野で大阪府の平均を下回っており、特に「生命」の領域において-2.2ポイントと大きく下回る結果となった。得点集計地をみると、50点以下の割合が大きくなっており、復習が必要な分野があると考ええる。

＜英語＞ 平均点の対府比が0.94(-3.5ポイント)であり、昨年度の対府比0.96と比較し、少し下がってしまった。全分野で大阪府の平均を下回る結果となっているが、「聞くこと」が-1.6ポイント、「書くこと」が-1.2ポイントと大阪府の平均との差が広い。今後、習熟度別授業等を行い、30～40点台の層の学力向上に向けて取り組んでいく。

【今後に向けて】

＜国語＞ 読む力・書く力の向上のため、漢字の小テストおよび新聞の書き写しを引き続き行う。また、記述式の正答率をあげるために、情報を読み取って、そこから課題を見つけ、主張文を書く取り組みなどを取り入れる必要がある。

＜社会＞ 記述式の問題に対応するために、授業の中で教科書やワークを使って、問題演習に取り組む活動を増やし、文章で表現する力を伸ばしていく。

＜数学＞ 「知識・技能」の中でも、基礎となる計算問題は、定期テストで常に出題し、取り組ませることを続けていくことで、力をつけていけるようにする。この基礎を土台として、発展問題にも取り組み、応用力につなげていくように努める。

＜理科＞ チャレンジテストの実施前に過去問を繰り返し、特に化学と地学の分野に力を入れた。その結果、生命の分野が疎かになってしまった。今後は、朝の学習や小テストの実施、授業の残り5分で分野を問わず振り返る等、日常的に各分野の単語に触れるなど、継続的な復習を行っていく。得点集計値が50点以下の割合が多いことから、全体の底上げを意識した基礎的な問題の取り組みを増やしていく。

＜英語＞ 英語を聞いたり書いたりする場面を増やし、来年度の入試に向けて、英作文などの対策をしていく。



調査結果から

【成果と課題】

○中学生チャレンジテスト(1年生)およびチャレンジテストPlus

＜国語＞ 平均点の対府比が1.10(+5.7ポイント)であった。いずれの分野において大阪府の平均点を上回っており、「話すこと・聞くこと」「読むこと」においては大きく上回っている。一方、「書くこと」においては大阪府の平均点とおおむね同じような値となっており、問題形式においても「記述式」においては、さらに向上できるよう、取り組んでいく必要性を感じる。

＜社会＞ 平均点の対市比が1.13(+6.7ポイント)であった。いずれの分野においても大阪市の平均点を大きく上回っており、特に「基礎」「短答式」において大きく上回っており、基礎的な学力が定着していることがうかがえる結果となった。基礎的な知識を活用して、多角的に考えることができるようになるために、授業を改善していく。

＜数学＞ 平均点の対府比が1.12(+6.0ポイント)であった。いずれの分野においても大阪府の平均点を上回っており、特に「数と式」「知識・技能」において大きく上回っている。例年本校では基礎的な学力の定着について課題があったが、この結果を受け、より発展的な学力の向上をめざし、習熟度別授業を展開していく。

＜理科＞ 平均点の対市比が1.18(+9.7ポイント)であった。いずれの分野においても大阪市の平均点を大きく上回っており、特に「基礎」「生命」「短答式」においては+10ポイント以上となっている。また、無回答率の平均が1.6であり、テストに対して積極的に解答しようとする姿勢がうかがえる結果である。

＜英語＞ 平均点の対府比が1.12(+7.3ポイント)であった。いずれの分野においても大阪府の平均点を上回っており、特に「読むこと」において大きく上回っている。また、20点未満がひとりもおらず、95点以上の生徒が全体の10.1%いる。今後もより発展的な学力を向上させるために、習熟度別授業をより充実したものとしていく。

【今後に向けて】

＜国語＞ 書く力を向上させるために、授業内でも自身の考えを書く問題を増やし、根拠を明らかにして記述できるようにしていく。また、現在取り組んでいる常用漢字やことわざ等の小テストも継続し、知識を身につけさせたい。

＜社会＞ 知識の定着は引き続き継続していき、グループワークを取り入れる中で、読解力の向上に努めたい。

＜数学＞ 思考・判断・表現にあたる問題の正答率をあげるために、発展的な問題に取り組む時間を増やす。個人で解ききる力をつけるために、グループワークやヒントを与える時間を作り、積極的に取り組めるようにする。

＜理科＞ 領域ごとにみると「エネルギー」に関する定着がまだ不足と考えられるため、再度復習をしていく。知識を活用する部分では、身近に起きる科学事象を理論的に理解し生活の中で利用できるよう授業を組み立てていく必要がある。

＜英語＞ 英語が小学3年から必須化された初めての学年であり、学習に意欲的に取り組む姿が見られる。毎日、英語をノート1ページ分書いてくる宿題を継続しており、英語を「書くこと」への苦手意識の軽減につながったと思われる。引き続き生徒の学習意欲を高めつつ、「聞くこと」の力も意識した授業を行っていく。

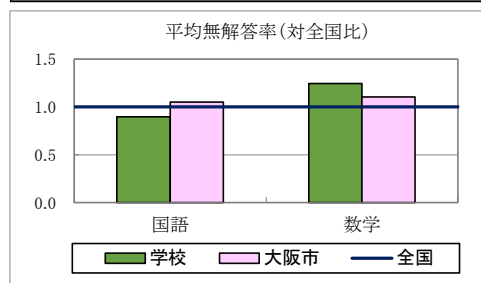
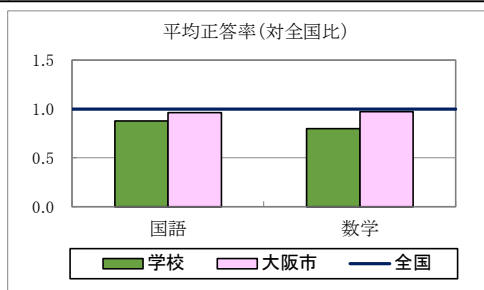
令和6年度 大阪市立市岡中学校のあゆみ  
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

全国学力・学習状況調査 教科に関する調査より

【 全 体 】

	平均正答率(%)	
	国語	数学
学校	51	42
大阪市	56	51
全国	58.1	52.5

	平均無解答率(%)	
	国語	数学
学校	3.5	14.1
大阪市	4.1	12.5
全国	3.9	11.3

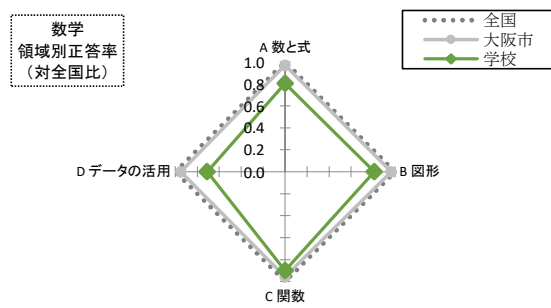
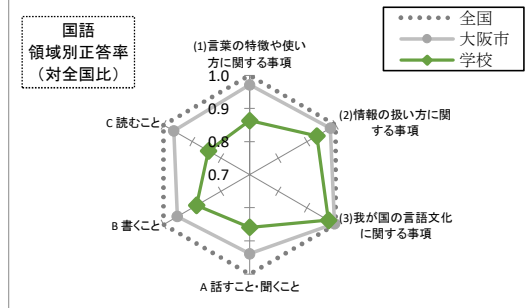
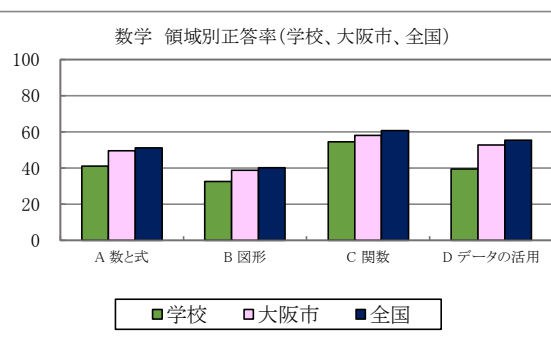
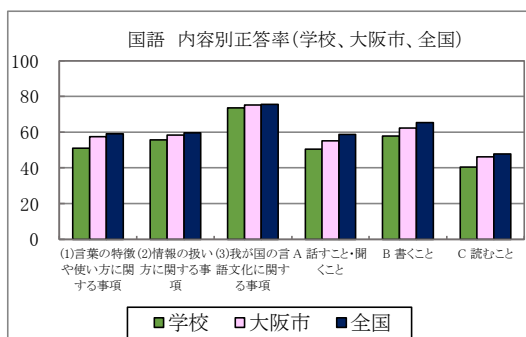


【 国 語 】

学習指導要領の内容	対象設問数(問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
(1)言葉の特徴や使い方に 関する事項	3	51.1	57.5	59.2
(2)情報の扱い方に 関する事項	2	55.7	58.5	59.6
(3)我が国の言語文化に 関する事項	1	73.7	75.3	75.6
A 話すこと・聞くこと	3	50.5	55.2	58.8
B 書くこと	2	57.8	62.2	65.3
C 読むこと	4	40.4	46.2	47.9

【 数 学 】

学習指導要領の領域	対象設問数(問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
A 数と式	5	41.1	49.6	51.1
B 図形	3	32.7	38.9	40.3
C 関数	4	54.6	58.1	60.7
D データの活用	4	39.4	52.8	55.5



# 令和6年度 大阪市立市岡中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

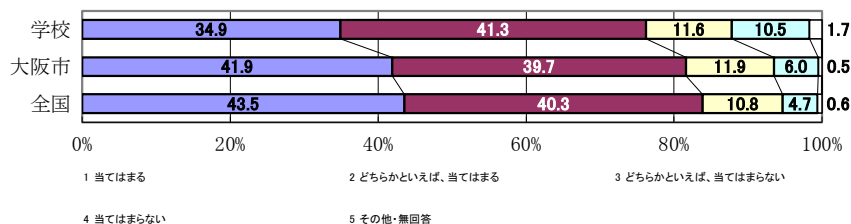
## 生徒質問より

1 2 3 4 5 6 7 8

質問番号  
質問事項

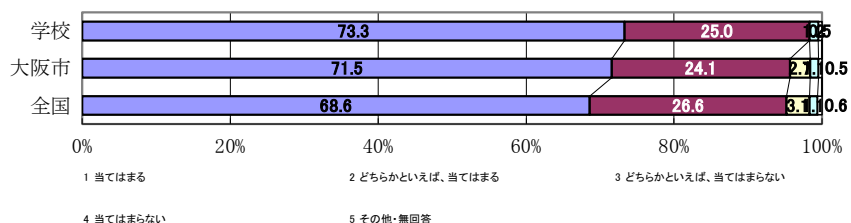
16

学校に行くのは楽しいと思えますか



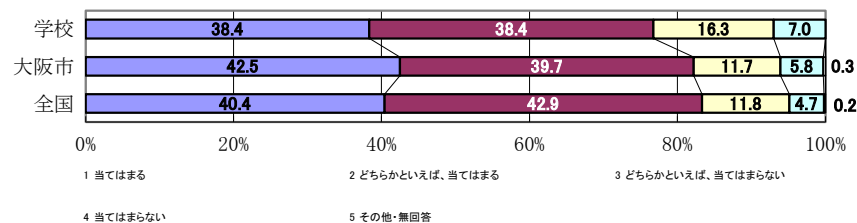
15

人の役に立つ人間になりたいと思えますか



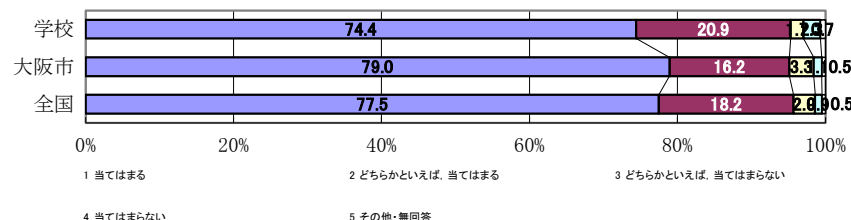
9

自分には、よいところがあると思えますか



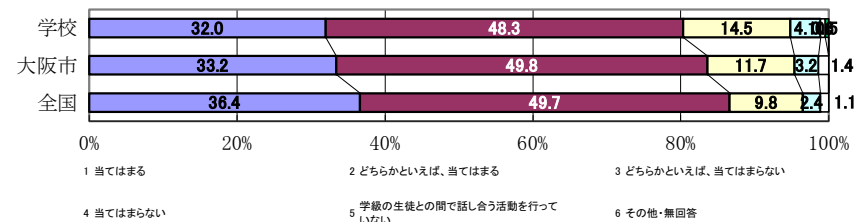
13

いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか



33

学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか





# 令和6年度 大阪市立市岡中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

## 学校質問より



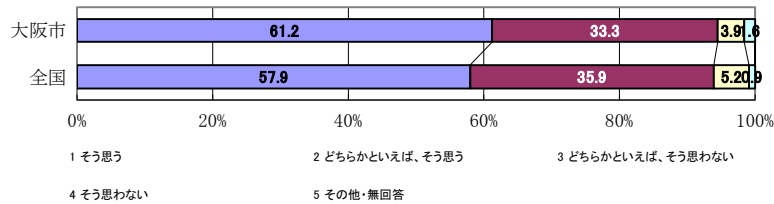
質問番号

質問事項

7

調査対象学年の生徒は、授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか

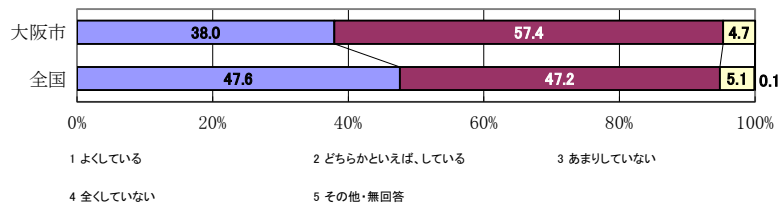
学校 「どちらかといえば、そう思う」を選択



16

授業研究や事例研究等、実践的な研修を行っていますか

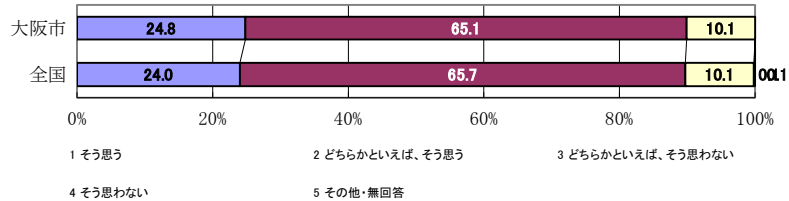
学校 「どちらかといえば、している」を選択



27

調査対象学年の生徒は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができていますか

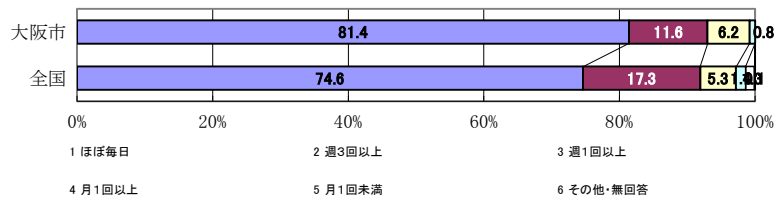
学校 「どちらかといえば、そう思う」を選択



57

前年度に、教員が大型提示装置等(プロジェクター、電子黒板等)のICT機器を活用した授業を1クラス当たりどの程度行いましたか

学校 「ほぼ毎日」を選択



62

調査対象学年の生徒が自分の考えをまとめ、発表・表現する場面では、生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか

学校 「月1回以上」を選択

